

ひょうご

きょう地域面3ページ



新人弁護士の抱負

受験生3万人に対し合格率3.0という難関「司法試験」をパスした「ルーキー」13人が、県弁護士会に新規登録された。裁判所や検察庁、弁護士会などでの一年半の司法修習を経て、弁護士として活動を始めるが、来年3月まで県弁護士会の研修を受けている最中。それぞれ光沢もまぶしいバツを付け、

弁護士としての一歩を踏み出したルーキーの方々にアンケートをお願いし、意気込みやあるべき弁護士像などを聞いた。

【藤田文亮】

※新人の登録時期に合わせ、新規登録や異動による増減を反映するため、タイトルの「ヒマワリオン(県弁護士会のイメージキャラクター)」の人数を、「424人」から「438人」に変更しました。

「人の人生に明かりともしたい」

◆なぜ弁護士に?◆

まず、職業として弁護士を選んだ理由について聞いた。

「他人の人生にかかわる責任の重い仕事だが、逆にそれがやりがいにつながる」(須山)、「基本的人権の擁護と、社会正義の実現」(土居)と、社会的使命を挙げた。

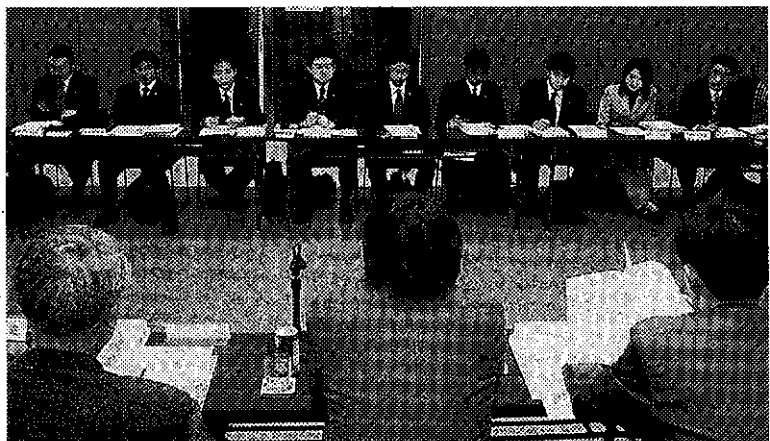
また、「自己の能力と責任で自由に出来る仕事だから」(持田)、「弁護士のざっくばらんな雰囲気自分が合うと思った」(平尾)、「他人を助けてお金をもらえるのは、職業として魅力的」(荻野)と、「一匹狼」でもある自由さも魅力と映るようだ。

◆弁護士としての目標◆

どんな事件に取り組み、どんな弁護士になりたいか。

「目の前の仕事を誠実にこなしたい」(持田)、「民事、刑事を問わず、幅広く何でもこなせるようになりたい」(谷林)、「人の人生に明かりをともしあげられるような弁護士に」(須山)、「市民に身近な存在になれば」(森竹)と、実直な意見が多かった。

その一方、「神戸ならではの貿易会社などの企業法務(予防的法務)と、普通の市民的な訴訟事件の両方」(平尾)、「ハンセン病訴訟のような弁護団活動」(土居)、「特に倒



緊張の面持ちで先輩弁護士から講義を受ける「新人弁護士」ら 11先月29日

元裁判官や検察官も

産事件に興味がある」(荻野)など、具体的な分野に触れた人も。

しかし、「今はもっぱら、初めて担当した国選弁護事件を良い形で解決することです」(平尾)と、ルーキーらしいつぶやきもあった。

◆弁護士や法曹界をどう変えるべきか?◆

「説明義務を尽くす。公益的活動に積極的に取り組む」(土居)、「法曹三者(弁護士、検察官、裁判官)の交流をさらに図り、それぞれの立場を今以上に理解できるようにすべきだ」(谷林)、「市民との敷居を取り払うよう努力すべきだ」(森竹)との巨視的な回答もある一方、「弁護士とひとくくりにはできないほど、地域によって活動は多様。神戸に限って言えば、ビジネス面で東京、大阪に引き離されない法的サービスの充実や質の追求が重要」(平尾)、

「医療過誤(ミス)や建築紛争など専門的事件について、専門家の一層の活用を図るべきだ」(荻野)と、具体的提言も。

さらに「社会的強者の代弁者になっている弁護士が多い。ただ、事務所経営と人権活動のバランスでジレンマに陥る場合が多いのでは」(須山)という、厳しい指摘もあった。

◆定年後も役立ちたい◆

今回新たに弁護士登録されたのは、法曹界のルーキーばかりではない。元裁判官6人、元検察官1人も含まれる。辻さんは、「余力があったので、少しでも社会に役立ちたかった」と、裁判官を定年退官しての弁護士登録。「市井のどんな事件でも、親切丁寧に処理する弁護士になりたい」といい、長年身を置く法曹界について、「倫理観に富み、社会に迅速に応じる態勢を整える必要がある」と提言する。

アンケートにご協力いただいた方々(50音順、敬称略)
 荻野正和(24)、須山幸一郎(28)、
 谷林一憲(38)、辻忠雄(70)、土居由佳(24)、平尾麻美(25)、持田俊介(27)、森竹和政(28)